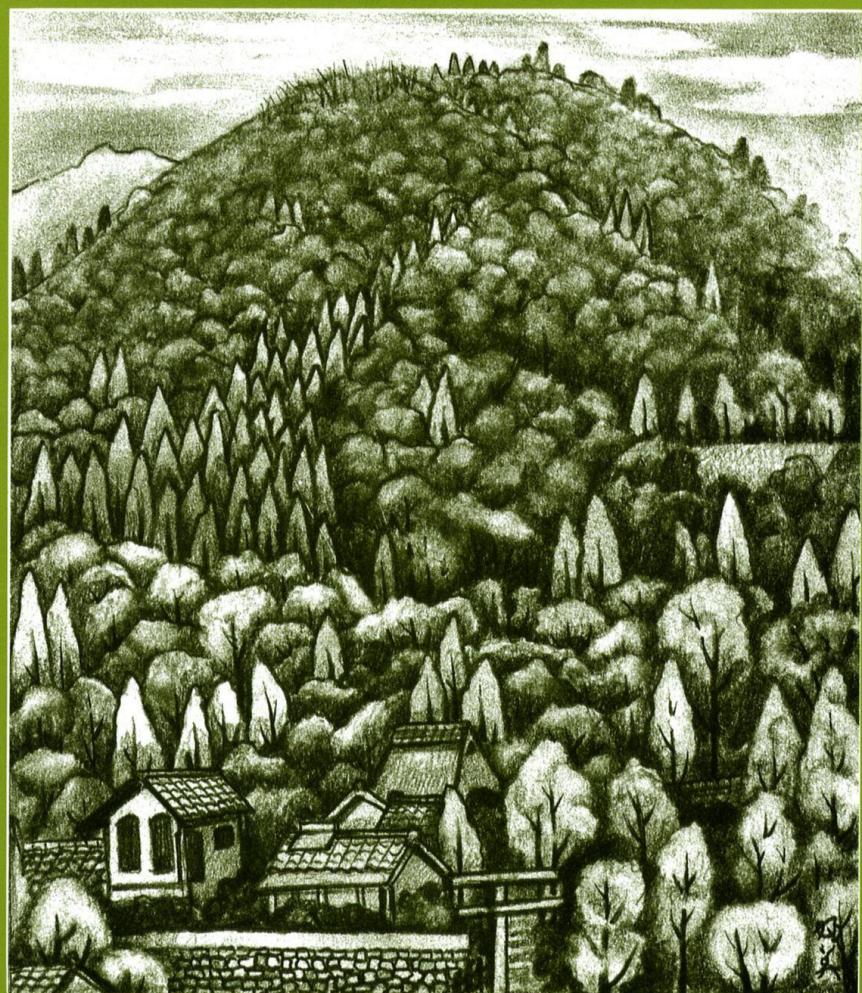


やまざき文化

'90-2 * No.9



山崎町文化連盟

“やまさき文化” 第九号発刊に際して

山崎文化連盟会長 壱 阪 毅

壽

やまさき文化も創刊してより、もう第九号を刊行するようになります。

これも毎回編集に携つて下さる方々の大変な御努力と、御投稿下さいます文化連盟の会員の皆様方の御協力の賜と深く感謝申し上げる次第です。

又、その内容にいたしましても、大変バラエティに富んでおり、恰も総合雑誌の観すら呈しています。又、投稿いたづいた文学作品、エッセイ、短歌、俳句等々は勿論表紙画及び表紙題字も總て山崎文化連盟会員の作品であるというところに地元文化高揚という観点から大変に意義深いものがあります。

地域に於ける住民の文化活動が、これから複雑な高度の文明社会を築いていくためにはどうしても必要不可欠のものであることは議論の余地の無いところであります。問題はその住民の文化活動をどう広めてゆき、どう高めていくかということです。

通常文化活動というようなことは、すぐにその成果の現れるものではありませんし、具体的にそれを仲々評価出来難いものであります。それだけに活動の輪を広げ高めていくためには、永い時間とたゆまぬ積みかさねの努力が必要なのであります。

幸いにいたしまして、山崎には町民の間に永年蓄積された文化資産とでも申すべきものがたくさんございますので、これを更に開発しそして横の連繋を図りつゝ一層進展していくようにすれば、すばらしい地域文化を持つた町となっていくと考えられます。そして此の小冊子“やまさき文化”がそういった文化活動を進めていくお役にいさゝかでも貢献することを切望いたしまして第九号発刊の辞といたします。



F.Y.

◇ 目 次 ◇

やまさき文化第九号発刊に際して

車曳き 安井 道夫
大アンデス文明展をみて 浅田 耕三
壱阪 毅

戦闘帽の教訓 小倉 正恒
大井秀子遺歌集 原田小次郎
俳句 赤穂吟行

山崎俳句協会雑談 山崎きよ子

第11回芸能祭ご案内 事務局

各地短歌会入賞入選作品 稲村 幸子

藤村省三歌集抄 千代 國一

ふる里創生に思う 堀口 春夫

小さな灯 志水 宗喜

創立当時を想う 久岡 久藏

とりかぶとの群落を発見する 久宗 丑雄

さつきの町山崎町 上野 一人

茶湯者覚悟十体考 庄 和夫

奥深き民謡への道 北川 政子

山崎の謡曲 林 武夫

閉幕新聞うらばなし 高野 一介

創立二十周年記念大会を了えて 後藤 登

森と文化的シンボジウム 小川 一孝

第二部について 藤井 七代

新潮会の思い出 和田 疎人

将棋遊び 荒木 俊介

菜の花漬け 荒木 泰子

編集後記 尾崎 正一

車曳き

浅田耕三

誦んじるようゆつくり呟く。
「それはな、人をゆるす事だ」

慣れぬ辛い仕事に、毎日黙々と励んでいる父の気持ちが、浩次には身を切られるようわかるのだ。ある日思い切って母に言つてみた。

「お話をあります」

「何ですか、そんなにあらたまつて」

「母上から申し上げて下さい」

「何を、なの」

「父上が卑怯な人などとは誰も思つていません。それに、ここでは誰も知らないですから、いつまでもご自分を苦しめるような事はしないで下さいと、そう申し上げて下さい」

母はちょっと息をのんで、浩次を見た。浩次は急に大人びた口をきいた自分が何だかきまりが悪くなつて、目を伏せた。

「浩次」と母が言つた。凜としたその声に、浩次が驚いて顔を上げると、「お父上はね、人の思惑などを気になさつてているのではありませんよ」

「――」

「ご自分のお気持ちが、ああせずにほれなゐのです。お前の父上は、そういう人なのです」

細い母の声は語尾が少し顫えていた。

去年暮の十二月十四日、元播州赤穂浅野家の浪人四十七人が、江戸の本所松坂町の吉良邸へ討入り、主君の仇、吉良上野介義央のみ首級を挙げた。

浪人方はそのまま江戸の大名屋敷にお預けとなり、今年二月四日の夕刻、それぞれお預け先の屋敷で切腹してお果てになつた。

討ち入りと同時に浅野の浪人達は大変な評判となり、こんな、江戸とも赤穂とも遠く離れている大阪の町の、それも、その日暮らしの職人や人足ばかりの住む長屋でさえ、寄るとさわると討ち入りの話でもちきり、みんなまるで自分が浪士達の知り合いか親類みたいな口振りで赤穂の鼠屋ねずまやをした。河津屋でもきっと同じ、仕事の合間など車曳き仲間が五人七人と集まって、わいわいやつていてに違ひないのだと浩次は想像

大阪の天満神社の西の道を北へ七、八町も歩くと、ごたごたと小さな商家が軒をつらねる。綿屋町である。

浩次の父源助はその町並の一郭にある運送屋「河津屋」の車曳きだ。

朝早く出かけ、いつも五つ（午后八時）を過ぎてから帰つてくる。

帰ると丸に河の字を染め抜いた、乾いた汗のあとがべつたり埃と一緒についた法被を、日のとっぷりと昏れた長屋の路地でばたばたはたいてから肩にかけ、今戻つた、と声をかけて入つてくる。

慣れぬ大八車を一日中曳いて大変だろうな、と浩次はそんな父の姿を見ると、何だか堪らない気がする。

父は家でも口数が少ない。多分外でもそうなのだろう。以前から無口な人であったが、近頃はそれが一層ひどくなつた、と浩次は思う。かといって、母や浩次に冷たいわけではない。貧しくても浩次の勉強する書籍代や油代などは決して惜しまないし、仕事から帰つて、行灯の下で浩次が論語の素読などをしていると、傍へ寄つてきて座つてじつと聴いてくれる。そんな時、浩次はいつもより大きな声を張り上げて読む。子貢聞いて曰く。一言にして以て終身之を行ふべき者ありやと。子曰く、それ怨か。己の欲せざる所を人に施すことなれど。」

「恕というのは何かの」

訊かれて浩次は一瞬何となく息を詰めるが、すぐに、

「他人に親切にすることです」

「ふむ、親切、のう」

「愛情や思いやり、でしよう」

「思いやりとはどういう事かな」

浩次が黙つてしまふと、父は浩次の眼を覗き込み、それから視線を壁の方へ移して

する。

そんな中で、多分無口な父は黙ってきているのだろう。時々意見を求めるべると、困ったような顔でぼそぼそつぶやいている父の姿が、浩次には目に見えるようだった。去年の夏、浩次の一家は姫路から明石の藤江に移った。そして間もなく母が病にかかりた。

初めは夜眠られぬと父にこぼしていた母が次第に足のむくみや躰のだるさを訴えるようになり、三度のご飯もすすまず、蒼い顔で伏せっている毎日が続いた。医者に診てもらうと賢の病だという。父は、少し残っていた赤穂の退去の時の分配金も、僅かの家財道具も売り払って母の治療代に充てた。

その年の八月初め、同志の大高源吾どの貝賀弥左衛門どのがお見えになつた。二間しかない家だ。母の枕元に座っていた浩次が、開け放した隣の間でひそひそ話をしている三人の方をちらと覗くと、対座している主客の中に、一枚の書き付けが置いてあつた。

父は黙つてそれを丁寧に折り畳んで懐に入れた。そして深々と一つ頭を下げた。

「くれぐれもお内儀を大切にのう」

二人の客は帰る時そんな挨拶をし、浩次にも、「坊、ご両親に孝養を尽くすのじやぞ」と言って出ていった。

母は布団の中で泣いていたようだ。

浩次はその時はお一人の訪問の意味がよくわからなかつたけれど、あとで考えると、父が、大石内蔵助殿を統領とする盟約を脱けたのは、あの明石の藤江の時だったのだ。父が懷へしまった書類は刈屋城明け渡しの時、大石殿に預けてあった誓約書で、大石殿は近畿各地に散らばっていた同志達の、いよいよの向背をたしかめる為、大高、貝賀のお二人をつかつて一人ひとり誓約書の一応の返還を勧めて回らせたのだ。応じるものはない、もはや當然是ならぬ、そうよんでも――。そして父はそれに応じてしまつたのである。あの時から父の脱盟者としての苦しみが始まつた、と浩次は思う。

上がり框の所で誰かが話している。時々父が小さくこたえる。声の主は、たしか河津屋で走り遣いをやつてゐる若い衆だ。うちへも何度か來た事があつて浩次は声に聞き覚えがあつた。

話しぶりがどうも尋常ではない。

「賊は三人、みな一本差しだす。番頭はんも女中衆もみな括られて、わてはええ塩梅に下の手洗に入つとりましたお蔭で見つからずにはすんで。へい、そつと抜け出て番所へ走つたんだけど、年寄りの不寝番が一人おつて、よしつわしはつなぎに行つてくさかい、と出でつたきりで、へい。そんでもんたさん車曳きだけど、元お侍やいうこと聞いてましたんで、わての一存でお頼みに上がりましたのや」「よしつ、すぐ用意するゆえ、お前はその間にこの右隣に初と駒吉という、若い威勢のいい駕籠かきがおるから、そつと行って事情話してわしが頼んだからと連れてきてくれ」

がしてならない。

今年二月末、明石にいた折の家主のお骨折りで一

家で大阪へ移り、口入れ屋の世話で父は河津屋で働くことになった。

河津屋の主人の佐兵衛という人は侠氣があり、父

が元播州赤穂浅野家の家来であつた事は知つていながら一切口外せず、慣れぬ躰に車曳きはつらいだろうからと、人夫の差配のような仕事をあてがつて下さつた。なのに父はそれを断つて車曳きを望んだ。



「何もそんなにご自分をお責めになる事はございますまい。その時は奥様がご病気だしたのやさかい止むを得なんだ、運が悪かつただけですがな」

佐兵衛さんがそう言つたら、父は遠くを見るような眼で、「その程度の事情をかかえた者は四十六人の中には何人もいた筈です。要するに私は武士として……」そう言いかけてふと気がつき、寂しげに苦笑して言葉を濁した、という。

大阪へ出てくる時、父は両刀を棄てた。

へい、と若い衆が出ていく気配。旦那様と母の緊張した声がした。

「心配するな。わしはもう武士などではないゆえ、危ない事はせん」

じっと寝ていたが、とうとう辛抱できなくなつて浩次が起きて唐紙をあけると、父は法被に大きなどんぶりつきの腹懸け、股引きと、正真正銘車曳きのいでたちながら、腰に兵児帶結んでいつの間に出してきたか傍には大小刀二本。

「旦那ッ」

いつもお喋りにやってくる隣の籠かき二人が、寝だけと緊張の奇妙な顔で入ってきた。元は侍と知つていて父をいつもそう呼んでいる。

「すまぬがちょっと手伝うてくれぬか。相手は三人だというから兄さん方の力をぜひお借りしたい。だが危ない目には遭わさぬゆえ、それは安心してくれ」

「へい、二人はすぐに応じた。

「てだては向こうへ着いて様子を見てから考える。すぐに出かけよう」

「どうぞ頼ります。早う、早うしとくなはれや」

若い衆は気が氣でないらしく、「非道なことなど平気でやりそうな連中だすさかい、盗んだあと顔を見られたから」と旦那さんの首落としたり家に火をかけるかも知れまへんでな」

「父上、私もッ」

突然浩次は叫んだ。

「いけませんよ浩次、子供の癖に何言うのッ」

あわてて止める母を手で制して、父はじっと浩次を見て大きく頷いた。

「うむ、漢籍だけが勉強ではないからな、わしのやり方見ておくのもよからう」

総勢五人、河津屋までは僅かに一町、ひたひた走りで駆けつけ、若い衆が脱けってきた裏口から足音忍ばせてそとに入る。植込みと台所の軒端の間の暗がり通りて下手洗の横から東の出口の開き戸を開け放した竪戸の敷居をまたいだ所で父が怒鳴った。

「来いッ盜賊共、おれが相手してやる」

賊がぎょっとしてこっちを見た。三人共蓬髪の、いざれ食いつめ浪人に違ひあるまゝいが、何と目付きの険しい男達か——。が、すぐに相手は一人、それも町人、と思つたか、手前にいた一人がぬつと向かってきた。あの二人は薄嗤いをうかべてこっちを見ている。

父が進んでいく。悪鬼のような賊の顔、そ奴が伸び上がるよう刀を振りかぶり気合いと共に真向から襲いかかった。父の姿が瞬間沈んだ、と思った時、黒い塊が矢のように向こうへ奔り抜けるのが見えた。くるっとこっちを向いた父の手に青眼に構えた白刃、敵味方場所を入れ替つた。

と、こっちに背を見せていた賊の黒い肩が、突然ぐらつと傾いた。崩れるように右膝をつく。おのれ、喚いて他の二人が同時に斬りかかろうとした時、父の左手が高々と挙がつた。そこここと、思い思いに隠れ今や遅しと待ち構えていた四人、それつと

佐兵衛は高手小手に縛られて座られ、三人の真中には、あられもない襦袢一つの姿でうしろ手に括られた若い女がうつぶせに膝を折り、右横顔をべたりと床板に押しつけられたひどい格好で転がされている。

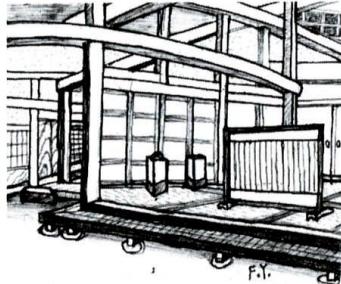
「ひどい事いやがる。娘はんいたぶつて旦那さんに錢の在処を吐かそうちゅう魂胆でつせ、あれは」

若い衆が声を慄わす。

「うむ、若い女にあんな格好までさせて責めたてるのは酷い奴等だ。よしつ、おれが左手を挙げたらお前達大声で騒いでくれ、捕り方だとでも、もう逃げられんとでも何でもいい。とたどた走りながら騒いでくれたらなおいいが、決して姿は見せるな。奴等追いつめられうるたえると必死に斬りかかってこぬとも限らんからな。わしが左手挙げるまでは隠れていてくれ、いいか」

「父上はッ」浩次が声を殺して訊いた。

「うむ、三人とも脅して追い払つたりだが、奴等のあのやり方見たら一人二人は痛い目に遭わさんでは肚が治まらぬようになつた。佐兵衛殿にはご恩もあるしの」車を曳く時そのままに向こう鉢巻ききりと締めると父は大胆に賊の方へ歩いていく。その背に力が漲つている。久し振りに見る父の背、父上は負けんぞ、絶対に、浩次はおのれのこぶしを強く握りしめ、物陰から凜然たるその父の背に熱い視線を当てた。



ばかりに大声をあげた。

「やいやい、もう逃げられんぞおのれ等」

「ざまあ見やがれ表は捕り方で一杯じやい」

駒吉はどこで見つけたか 古鍋がんがん叩いて走り回る。

ぎくっとして二人の賊は立竦み、一目散に表戸へ向かって走った。が、表戸は自分達の手で門を下ろしている。先頭のが開けるのに手間どっている所へ父が追いすがつた。後の奴が振り向くやその手の白刃が躍った。見ていた浩次の喉から思わず獸のような呻きが洩れた。父の気合い、同時に物のぶつかる激しい音。

浩次は夢中でそっちへ駆けた。

最初の賊は右の太股を父に斬られて怪我したが、さほどの深傷ではなかった。二人目は、斬りかかったが父に躊躇され、つんのめった所を腰を蹴りつけられて羽目板にぶつかり、肩と腰に打撲を負っていたがこれも大した怪我ではなさうだった。一人は逃げたが二人は捕まつて町奉行所の手のものに渡された。

縛られて納戸に押し込められていた河津屋の奉公人七人、それと佐兵衛にお内儀さん娘、全員無事に助けられ、打撲を負った賊がまとめて懐に入れていた錢も戻った。噂はたちまち近所中にひるがり、父は大評判、特に髪結職人や鑄かけ屋、大工に鰯屋におうれん屋などの同じ長屋の連中がわしらの先生の大手柄じゃと大騒ぎ、初さんには駒吉さんなどはまるで大名にでもなつたような威張りようだったが――。

三日後に売り出された瓦版に、どこで聞いたか、多分口入れ屋あたりで仕入れたのだろうが、河津屋に押し入った賊を取り押さえたお手柄の車曳き先生は、何を隠そう元播州赤穂浅野の浪人、事情あって仇討ちの盟を離脱し云々、と出た。

とたんにあれ程騒いでいた長屋の連中、びたつと鳴りをひそめ、二人の駕籠屋も隣にいるのやらないやら、しんとして声ひとつ聞こえぬ。父は何も言わないと、河津屋でも同じような様子らしく、父の仲間の車曳きの一人で浩次もよく知っている松吉という男に外で出会うと、子供の浩次にさえぶいと横を向いた。

「浩次」

相変わらず日が昏れて戻ってきた父が、黙つて本を開いている浩次にいった。

「声を出して読め。漢籍は朗々と声高らかに何度も読むものだ。それでなければ意味は汲みとれぬ、聖賢のお教えはわからぬぞ」

浩次は黙っていた。

「うん? どうした」

「――」

「何だ、お前泣いているのか」

浩次は慌てて着物の袖で眼を拭った。

「男の子が泣いたりするな、みつともないぞ」

「父上は、くやしくはないのですか」

わっとまた涙が溢れた。ははは、父の届かない笑い声が狭い長屋の二間に響いた。

「いいか、こんな事ぐらいでめそめそしていたら、一生ふさいでばかりおらねばならんぞ」

そしてひどく優しい声でまた、

「いいから読め」

はい、浩次は涙をぬぐうと急に大きな声を張り上げて読んだ。

「子責問いて曰く、一言にして以て終身之を行うべきものありやと。子曰く、それ恕か。己の欲せざる所を人に施すことなけれ、と」

「もう一度」

「はい」浩次は更に大声で読んだ。

「どうだ、胸のうちがすっきりしたろう」

「くりとうなずいた。



『大アンデス文明展』をみて

安井道夫

私が、その場所に言うにいわれぬ魅力を感じ、必ず行ってこの目で確かめたいと最初に思ったのは、ペルーからボリビアにかけてのアンデス山地である。

いまもその思いは変わらず、満たされないまま現在に至っている。

今回の千里、民族学博物館特別展『大アンデス文明展』は、その渴きを癒してくれなかつたばかりか、反ってその展示品の生々しさに、またしても強いインパクトを受け、あまりに多くの問い合わせに答えるすべもなく、私はじっと立ちつくしていたのである。

その思いは次のような光景から発したものである。

アンデスは、環境からいっても、社会情勢からも非常に複雑な状況にある。同じ高地文明でありますから、たとえばチベット文明が三、〇〇〇メートル以上のヤク飼育可能な高度に限定されるのに対し、ここではチャラと呼ばれる狭い海岸線から、一きょにリヤマ、アルパカの放牧地のゆるやかな草原、ペーナ（四、〇〇〇メートル以上）に及ぶのである。その間、果樹の豊かな Yunca、温暖な谷間と天をつく段々畑をもち高地最大の農業地帯をなすキチュア、ここにはカハマルカ、ワラス、クスコなどの都市も集中する。そしてペーナに近づくにつれて年間平均気温も一〇度以下となり、ジャガイモなどのイモ類と一種のマメ類しか栽培できないスニに続く。落ち込んだ東側は、アマゾン河の源流域で、広大な熱帯雨林が茫茫としてかなたのブラジル平原へと連なっている。

会場に入るとすぐ、この地形が一目で理解できる模型が置かれている。

農耕民のなかには、ペーナの牧畜と谷間での農耕のため三、〇〇〇メートルの高度差を上下する「垂直統御」の生活形態が存在したのである。彼らは、自作地に通うの歩いて一週間近くかかったという。さて、私は脳髄深く焼き付いた一枚の写真をいまも鮮やかに思い出すことができる。

インカの精巧な石積みの壁に沿って、堂々とした体躯の修道女が胸をはって歩いている。その後ろ、数歩遅れて前かがみに大きな荷物を背負ったインディオの老女がとぼとぼと歩いて行く、そんな写真であった。

女たちは、かつての繁栄をきわめたインカの末裔のケチュア族かアイマラ族で、よれよれのフェルト帽に垢まみれのポンチョ（貫頭衣）をつけ、ショーウィンドーを覗き見し、立つたままパンくずをほおばりながら客待ちをするのである。ポーターとして、白人やメスティソ（混血者）の買物帰りの婦人たちを待つて生計の糧をうるのだという。

またもう一枚、もっとありふれた写真もある。一段高くなつた舗道に足を開くように腰掛けたインディオの女がひとり、粗末な食事をとつてゐる。傍らの手提げかごの中には、ササゲ豆の類か、青々としたほんのわずかな野菜が顔をのぞかせ、現金収入のため用意されているのである。

さて、コロン（コロンブス）の「新大陸発見」と、それに続く中米、南米各地で繰り広げられたスペイン人の専横は、その行為の残酷さにおいても今世紀のナチスのユダヤ人虐殺以上の人類史に対する大きな罪責をもち、それがキリストの名において行われたことは、いまだに解決できない問題を放置したままにしているのである。近代化の根源たるヨーロッパの進歩思想の限界を見極めるためには、その地でつぎつぎと起つた事件を反芻してみるのがもともと近道と思われる。その私の思いは、この展覧会をみてはつきりと確信にまで高まつていつたのである。

一五三三年、カハマルカに攻め入つたスペインの征服者ピサロは、国内の動乱に乗じてインカの王アタワルパを捉え、翌年処刑。一五七二年にはインカ最後の反乱も鎮圧し、「富の公平な分配が行われ、農牧業が栄え、飢える者はなく、老人や身体障害者も安心して暮らすことができた」といわれる、人類史上珍しいユートピア社会を一瞬にして破壊し尽くしたのである。

インディオには、キリスト教の神観念がないから、魂をもたない家畜の類として分類、征服者たちで分割分配してこれを頤使（レパルティミエント）し、教化を行つよう神から委託された（エンコミエンダ）ものと勝手に決めてかかつたのである。そのため、ペルーにおいてだけで植民地時代の最初の八十年間で、約七〇〇万人のインディオが絶滅した。それはインカ帝国時代の全人口の七〇%に相当するといわれ

る。

そのときひとりの聖職者（スペイン人ドミニコ会士バルトロメー・デ・ラス・カサス）がいて、その実情を憂え、『インディアスの破壊についての簡潔な報告』という一冊のパンフレットを書き、自国民の行為をはげしく告発した。

当時のヨーロッパ人は新大陸に自らの「伝統的思考の枠組み」を押しつけることができたことから、精神的にも技術的にも大きな優越感をもち、地上のどこであろうとなんの不安もなく闊歩できる自負にみちみちていた。

当然、現在にまで続くラス・カサスの告発に同調するような者は、軍人をはじめ聖職者のなかにもひとりとしてなく、以後の「世界史」は

そんな征服者の單一な眼差しで記述され理解されることになったのである。

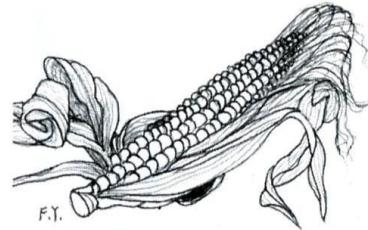
会場に入り、順路に沿って左に曲がると、「自然と人間」のコーナーがあつて、アンデス原産の作物の数々が紹介されている。

トウモロコンは、見なれた黄色のものから白、赤、黒いものまでさまざまな品種の乾燥した実物が、大きな袋のなかに入っている。イモ類は、さすが実物はないが写真があり、ジャガイモなど何か別の果実を思わせるほど、色もかたちも大きさも、栄養価もまちまちでちょっと信じられないほど多様である。

その外、この地の原産種としては、トマト、ピーナッツ、トウガラシ、カボチャ、ヒョーテン、サツマイモなど数多く、それらの作物の移動の後を追って世界をめぐるところ半殺しの被害者から奪ったジャガイモが、いかに大きな役割を演じたかは、ヨーロッパの小国アイルランドの運命を見るだけに十分過ぎるほどである。

新石器時代の人々が人類に与えた比べるものないほどの大きな功績は、野生動物の家畜化と野生植物の栽培化だといわれている。

いまのアンデスの地には、さまざまな作物の原産種が見出されている。たとえば、ジャガイモの野生種は、普通指さき程度の大きさで、その上有毒成分を含み、そのまま煮ても食べられないものである。



ここだけに原生種が存在するということは、一、二万年前からインディオの祖先たちが育種に努力してきた証拠になるのだろう。

野生種から栽培種へと育種するには、とてもない時間と能力がないとなしいうことではない。とくにアンデスのように、四、〇〇〇メートルに及ぶ複雑な地形のなか、さまざまな生態学的フロア（階床）でのそれぞれの育種は、並大抵のことではなかつたと思われる。

アンデス文明は、文字を使用しなかったこと、鉄器や車、ろくろなどを知らなかつたことから、私たちにも異様な文明という印象を与えていたが、その過酷な自然環境を、極めて有効に利用する驚くべき体系を作り出し、天水保有のための灌漑ひとつとっても、階段畑や海岸砂漠地帯などの耕作化のためさまざまな方法が開発されていた。ただし、スペイン人はそれを維持することができず、征服後はすぐに荒廃してしまつたのである。

自然との親密さと農耕の神秘さは、壺の意匠にありますところなく表現されている。たとえば、作物では、細口短頭壺の肩のはつた上部いっぱいに五、六個のトウモロコシを不規則に配したもの。それは粒の列が十二ぐらいまでのアンデスではもつとも基本的なかたちのものだという。

もう一つ、同じ短頭壺でもこちらは注口の部分に神の顔が造られ、その上半身の衣類の文様にあるたる部分にトウモロコシが縦に配されている。その部分が盛り上がりつて嬖を作っているように見える。

数多くの深い目をもつたジャガイモの両耳壺がある。これはアンデスにある数千種というジャガイモのうち、あまり改良の進んでいない品種の表現で、味がよいため自家用に好んで栽培されるのだという。

いく筋かの上下に走ったふくらとした線条をもつたりアルなジャガイモの壺もあり。根菜としての自然の生命力がみちあふれ、その歪んだふくらみがはち切れんばかりに表現されている。細口の傾き具合も面白い。

そのほか、いがぐり頭のようなサツマイモ、茎から三つに分れたマニオク（キヤッサバ）。また、反り返った「豆のバケイ」、これは注水筒器で、樹高数メートルに達する木の、鞘をもつた果実で三〇から五〇センチの大きさをもつというが、その綿毛を食用に供するだけに、实物を知らない私にも实物をほうふつさせる喚起力をもつてある。

カボチャは、紀元前三、〇〇〇年から、すでに食料として重要な役割をはたしてい
たが、横縞の入った丸形のもの、横長の楕円形で、太い横縞の交互に斑点の入ったも
の、偏壺の縦にへしやげたものなどさまざまな種類がある。

ナスカ文化期（紀元一〇〇一八〇〇年）の双注口壺の彩色も、また美しい。

ここでは、これまで見てきた北部チャビン系の塑像的でリアルにものを写しとろう
とするのではなく、平滑のみがかった表面には、シリップ（化粧粘土）による分様が
多彩で象徴的に描き出される。

豆類のパヤルを描いたものなど、二個ずつ芽の部分が合わさって、動物の目のよう
にユーモラスで、デザインとしても非常に高度な様式性に達している。

さて、同じ壺でも作物の主題を離ると、時代や地域による器形の変化だけでなく、
装飾文様も神話や儀礼の宗教的なもの、また細密描写的戦争の場面から幾何学文様ま
で多様化し、色彩も十色を超える精緻なものも出現するのである。

無彩色ながら、生活のにじみ出た面白い浅鉢があった。

三、八〇〇メートルの高所にあるチカカ湖周辺のアイマラ族は、湖畔に自生する
トトラというあしに似た植物で、「あし舟」を作る。会場にも、実物が展示されてい
るが、前後が反り上がった姿は美しく、繩で均質に締めあげた艶やかな胴体は工芸品
のような輝きをもっている。

その浅鉢の真ん中に生え出了ような、あし舟が取りつけられ、不似合いに大きな二
人の男が背中合わせにかいを漕いでいる。その手つき、男の目鼻立ち、頭飾り、綱
模様の衣装、あし舟の縄目まで、素朴ながら、心憎いほど細部の造型に気が遣われて
いる。

この浅鉢に酒をみたすと、チカラの湖面が顯現する。大湖の水を飲み乾すほどの、
豪快な飲酒の習慣は、さすが日本に茶道があるように「酒道」というものがあつた土
地柄だと感心してしまう。

いまでは、チチャという酒は、トウモロコシをはじめ、キヌア、マニオク、ピーナ

ウ、モイユの木の実などから造られる。

チチャが祝祭や儀礼の必需品であったのは当然であるが、アンデス特有の共同の労
働にも無くてはならないものであった。

アンデスには峻険な土地が多く、農地なども取得したからといってすぐ役立つもの
ではない。山の斜面の切りくずしからはじまって、気の遠くなるほどの石積みの作業

岩盤をくりぬいての灌漑用水路の設置など、村人の共同による地道な工事があつてよ
うやく耕作が可能になる。

ここには、土地所有権を重視する私たちの目からは捉えにくい、互恵と再分配のため
の巨大なシステムが機能していたのである。アンヌという親族集団を基盤とする村
中での互恵労働から、国家的労務提供であるミッタまで、労力や技術が最大の財産と
みなされていた。

それゆえ、アンデス文明は貨幣をもたず、貢物や通常の意味での租税の制度もなく、
たとえばクラカと呼ばれた首長は、旧世界の領主や地主とは違い、土木工事などの監
督か、ミッタの見返りとして行われる富の再分配の調整、仲介役にすぎなかつた。

そうして、それらの労働の後に、必ず大量の酒が消費されたのである。

土器とともに、染織作品もまた世界でも例のないほど優れたものが多い。十年ほど
前、天野博物館所蔵品による『ブレ・インカの染織』という展覧会をみて、その技術
の多彩さ、質の高さに驚いた記憶がある。

今回も海岸砂漠地帯発掘のミイラの出品とともに、それを巻いた膨大な綿布や色鮮
やかな衣類が展示されている。

それは緩れ織りから絞り染めまで、あらゆる種類の染織の技法があり、文様は異様
なジャガーの神像、コンドル、カニ、花、トウモロコシ、入り組んだ幾何学文など、
生活の全領域に及ぶのである。

ところが、その優れた伝統も、スペイン人の侵入後あつという間に崩れざり、ヨー
ロッパ世界との接触後の染織の質の低下は、目を覆いたくなるほどの極端さであると
いう。

ここにも、近代化の枠組み思考の中では理解できない、さまざまな事実が隠されて
いるのである。

アンデス文明のあらゆる事象は、

「・・・われわれが無意識のうちにモデルとして使いがちなヨーロッパ的在り方とは
大きく異なっている。アンデスの歴史や文化を理解するためには、根本的な視座の変
更が要求されるのである」（本展覧会カタログより）

そういう視点の転換ができるなら、地球環境汚染の問題ももっと深く捉え直すこと
ができるに違いないと思う。

戦闘帽の教訓

広島県立大学教授 小倉正恒

過日、編集委員から貴誌への執筆を依頼され、承諾したものの即座に題材が思い当らない。そこで、私自身の処女論文について身の上話を述べることでお許し願いたいと思う。

私は、生来、学校での勉強は好きな方ではなかった。教えられる事を頭に入れることは苦痛でもあった。そのような私と法律学との出会いは、父の退職時にある。法律を知らない父は苦しみ悩んでいた。この姿を見た私は、幸いにも、自ら学ぶ勇気を喚起した。大学では、法哲学、憲法、行政法総論、行政法各論、民法総論、物権法、債権法総論、債権法各論、刑法総論、刑法各論、親族相続法、会社法、手形小切手法、労働法、民事訴訟法、刑事訴訟法、政治学、外交史、経済原論、西洋経済史、経済政策、社会政策、公企業経営論などの授業を聞くかたわら専門書を多読した。法律の本は判例で具体化され例示されているので興味もわいた。また既に学習していた教育原理、西洋教育史、教育社会学、青年心理学、児童心理学、教育心理学、性格学など多方面な分野にまで専門書を読む意欲と機会をえたのである。その他趣味的に文学や教養文庫、特に塙尻公明著作集を愛読した。始めは多読乱読主義だったが、多くの書物に当っているうちにだんだん精読主義にかわってきていた。特に法律学の書物は、緻密に、要点をメモしながら読んだ。授業の助けもあって、断片的な知識は身についたよくな気になつた。しかし著者の論旨の運びなどは気にしていかなかった。それが同じ本を二度、三度と繰返して読む機会をえて、「何故にこう言えるのか」、「なぜか」と問い合わせながら、その解を書物の中に探し求めるようになった。更に詳しく著者の論文を大学の図書館で熟読するという方法を習慣化していく。精読で想出があるのは、木村亀二著、刑法総論の難解なページを何回も読んでとうとう脳裡から離れなかつたことである。哲学者から刑法学者へ変身された木村教授の文章には含蓄が深く学生には難解なところがあつたのである。

このお蔭で大学院時代に、ハンス・ベルテルの目的的行為論に関する論文が一つ

書け、刑法の福田平教授に評価された。院生になると、対立する学説の論点を究明し、その学者の論文集を精読するのに時間をかけた。小さな論考やレポートを書くことはあつたが、かねてから大きなものを書きたかった。この頃から専門分野で「司法審査の範囲」とか「憲法訴訟」「統治行為論」といった問題意識をもって読書するようになり、日頃から資料を集め努力もしていた。資料を整理しては、学者がいまだ誰も踏み込んでいない未踏の地を探していった。誰も考えていない理論構成を構築するメモも沢山作つた。真の論文は、未踏の地に構築されるという信念を以つて長い期間を費やした。そして頭の中は、自分の理論が学界に通用するかどうか、心配と不安で、いっぱいだった。この不安を解決するために、大学院で私を指導する俵静夫教授に尋ねようと思った。自分の指導教授に指導を受けるのは、この時が初めてであり、また最後でもあつた。俵教授は、憲法学の権威であり、地方自治法では我国の第一人者でもある。院生で指導を受けてるのは私一人で恵まれていたのに、今まで自分の力不足を感じて尋ねようとはしなかつたのである。私は、俵教授に、私の考えの批評を願うた。院生で指導を受けてるのは私一人で恵まれていたのに、今まで自分の力不足を感じて尋ねようとはしなかつたのである。私は、俵教授に、私の考えの批評を願うた。教授は、研究室の鍵を手渡されて、明日、教授の机上に参考になるものをしておくからよく見るようと言られた。私は、自分の理論構成について正面から教授と議論できなかつたこと、そして鍵だけ渡されたことに少々不満があつたが、何分にも論文作成中に指導教授に資料も話さず、相談もせらず、自分自身で論考を進めてきたこともあって、教授が立腹されているかなと思つたり、いや、教授の説明が長くなるから机上の書物を読むようという意味かなと思つたりした。その夜は色々と考えた。翌日、俵研究室へ入つて机のそばへ行くと、机上には何の書物もなく、一枚の紙すらない。ただ、戦争中に兵士がかぶる戦闘帽が一つ置いてあつた。敗戦後二十年の歳月を経た戦闘帽である。これをジーと見つめて、私は独り、背筋を伸ばした。そして非常に長い間考えた。生来、短気であった私にとって、この時から少し気が長くなつたよう思う。このことが最高の研究指導であったことに気づいたのは、一度のことである。その後、自分自身の考え方のみで論文を完成し、神戸大学へ提出した。論文審査は、俵静夫（憲法）山田幸男（行政法）山木戸克己（民訴法）の三人。この三人の最高の評価に、私は爾後自信をもつて論文を書き、著書を出し、学者の道を進むことになった。そして私の教え子の中に、この学問の道の険しさを実感する学徒を見出したいと思っているのが、今日此頃である。

（庄能出身）

俳

句

原田小次郎

赤穂吟行

折りからの落花ともあいまって何とも言えぬ風情を呈していた。
銚眼に花びら溜り赤穂城 八重
大石旧邸や長屋門も見てまわる。

落椿大石旧邸閉じしまま 泊水
長屋門昔を今に紫木蓮 とみ代

平成の呼び名にもようやく慣れた、平成元年四月十八日、私達青嶺句会一同主宰者の和田疎人先生以下十六名は、マイクロバスに乗り込み、赤穂へと向かった。

例年のことではあるが、この日も、毎月例会の代わりとして吟行で一日を過ごすのである。

林歯科医院の院長の林先生のお世話で、赤穂の貴和荘で昼食を摂る予定であった。

この貴和荘は県内の歯医者さん同志がお金を出し合い、本人とその家族達の頼いの場として作られたもので、神戸の本部からの承諾書がいるという、ちょっとむずかしい所であった。

とにかく一同はマイクロバスで一路、赤穂へと向かう。前夜の雨も嘘のように晴れ上がり、皆の普段の心がけの良さが証明されることになった。十一時半に貴和荘に到着の予定が、十時過ぎに早々と赤穂市内へと着いてしまった。

時間調整の意味もあり、大石神社を訪ねることとする。大石神社には各義士の幟がはためき、陣太鼓も飾られており、

瀬戸うらら梶取る舟のゆるやかに 良子

春かぜにしぶき寄せ来る片男波 秋藻
一舟の水脈うららかに海を截る 疎人
帰りのバスも楽しく、おしゃべりはつ

きぬまま、途中相生駅で秋藻氏と別れ、夕刻山崎へと帰着した。

岩礁を沈めて海のうららかに うららかな海に舟がゆっくりと動き、静かに寄せ来る波に桜の花びらが舞い落ちると、全く春らしいのんびりした光景であった。

木蓮と言ひ椿と言ひ、昔の古い建物に花のある風情はどこか寂しさを漂わすものがある。

城堀の濁りて木蓮まだ咲かず 春霞水平線に定まらず

泊水 波照りて海に落花のしきりなる

小次郎

思ひに茶などを飲みながら休息を取る。やがて昼食が運ばれる。なかなか凝った料理で、全て海の幸、山の幸を使い、

優雅に並べられていた。更には、汁椀の中に一片の桜の花びらが浮べられていて、

アベックに写真頬まれ春うらら 延子
アベックなども行き交いする。

こんな光景もあった。

やがて所定の時刻となり貴和荘へと向かう。そこにはすでに、中野秋藻氏が待つておられた。氏はやはり青嶺会の一員で、現在は姫路に在住。山崎俳句大会の選者も努めておられる実力者である。

貴和荘の二階に通され、昼食までの暫くの間それぞれに窓から海をながめたり、

ベランダに佇って句想を練る。ほど経て被講に移り、前掲の句と、次に記す句等が高点を得る。

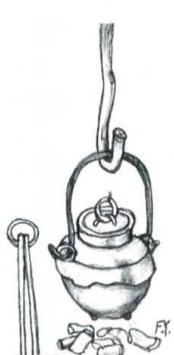
参加者氏名（アイウエオ順）

秋久光子 芦田八重 石野光栄
大谷延子 高野薰風 高野南嶺

下村君子 杉本いし 田中良子
千里光子 永井とみ代 中野秋藻秦千里

原田小次郎 原田駆雲 藤家千代
福田泊水 和田疏人

千代 南嶺



俳句協会雑詠

- 片方のズボンは別の草風
不機嫌のごと不言マスクして 中野秋藻
买到足してマスク一つも旅用意 芦田八重
- 黒マスクして恐ろしき大男 原田小次郎
弁明はする気もなくてマスクする 村元優子
- マスクして心異なる夫婦かな 福田泊水
軸一字茶の花一枝刀自の部屋 高野東三
- 銀婚の旅に賜わる梅日和 下村君子
茶の花の金粉こぼし虹日和 石野光榮
- 言ひ訳も愚痴も隠してマスク外る 秋久光子
- またの名をマスク美人と呼びもして 山田東雄
- 冬蝶と陽を分かちをり縁の先 藤家千代
- 千蝶に縋り舐めいる冬の蝶 高野薰風
- 万華鏡見ること紅葉日に映えて 深川春雄
- 理髪店湯気まつ白に冬めける 姫野正子
- 冬めきて母の重ね着また増えし田中良子 牛川信子
- 看取り妻冬めく街に小買物 木村一子
- 廊寒し首に耳立つ手術室 高畑義峰
- 目で会釈交して二人ともマスク 杉木いし
- 寺の森墨絵の如く冬霧に 小島やよい
- 尾崎いぢ
- 大谷延子

冬の蝶我が身の老いを重ね見る

春名寿女

銀のとき日輪冬の霧

土井さだゑ

若水のほのあたたかし掌を合す

和田疎人

「さわらび集」

- 万華鏡廻し夜長に夢彷ぐ 薄木満寿恵
客去りて秒針の音冬座敷 川崎栄子
- 夜の寒く夫と酌み交う酒少し 小林繁生
- 冬の震動き川面のあらわれし 庄昌子
- 若きらに昔がたりや夜長酌む 藤井加代子
- 冬の震動き川面のあらわれし 庄昌子
- 若きらに昔がたりや夜長酌む 藤井加代子
- 不意つかる大かまきりに後づさる 藤井七代
- 冬の震動き川面のあらわれし 庄昌子
- 若きらに昔がたりや夜長酌む 藤井加代子
- 石蕗の黄に見失いたり小さき蝶 本條栄女
- 車寄す音に鴨はや岸離る 本條淑子
- 峠の里山脈深く星澄める 山中正子
- 諳んじる師の句の載りし日記買う 和田疎人
- 町民の皆様方のご声援をいただき、
親しまれている“秋の芸能祭”を、
今回から、四月二十九日（みどりの
日）に変更させていただくことにな
りました。
- 会員の練習の成果を、ぜひご観賞
くださるよう、ご案内申しあげます。
- 参加部門
- 山崎詩舞道連盟
- 山崎謡曲同好会
- 山崎邦楽邦舞研究会
- 山崎郷土芸能保存会
- さつき民踊グループ
- (芸能祭実行委員会)



第11回芸能祭ご案内

日時 平成2年4月29日(祝)

午前10時30分から

午後4時30分まで

場所 山崎文化会館

主催

山崎文化会館・山崎町文化連盟
後援 神戸新聞社・山崎町教育委員会

短歌

大井秀子遺歌集

『花は終りぬ』

稻村 幸子

「この集は、大井秀子さんが昭和五十一年から平成元年まで、年齢でいえば八十三歳から九十六歳までの間に、歌誌『白珠』に発表された作品の中から四百七首を選んだもので、『しら秋』『せせらぎ』に次ぐ第三歌集である」と、故人生前に依頼を受け、選歌出版の労をとられた藤村省三氏がその跋文に記されている。

筆の葉の白く枯るるは忌のきざしひよ
と私が死ぬかも知れぬ
時来れば盛りの花も散りゆくと心しづ
かに終の日を待つ

一首目は最晩年の作、二首目は辞世。

歌人としての長い一生の終りの、何とい
う見事な締めくくりであろう。

美容院の鏡にうつるわが顔の角度かふ
るも死に向ふ顔

「老醜でなく老秀でありたい」と願った
人があるが、大井秀子様は、これらの歌
でも知られるよう、常に身嗜みよく、
腰の曲がらぬ瘦身に、夏は小千谷縮を、
冬は紬の綿入れを召して、ゆっくりと散
歩される後姿は正に老秀の感があった。

精進を続け、晩年において、尚このよう
に感覚の新鮮な歌を試作し、批評に耳を
傾けられた事を付記して、遺歌集「花は
終りぬ」の紹介とさせていただく。

歌集『播磨路』に寄せて

それは、いつ訪れるかも知れぬ死への心
構えによる身嗜みであり、明治年代の半
ばを生きてきた女性の心意気でもあった
のである。しかもその心意氣が一首一
首の裏打ちとなって一巻を貫いている。

台風のはげしきに交る基石の音ともし
きかなや無心といふは
逆縁の子らには触るなき夫のわれを
頼りて百歳となる

大井秀子様は、周知のとおり、郡内の
最高齢者で、百三歳の誕生日を目前に逝
去された大井萬兵衛氏の夫人である。

墓碑墓石かたへに夫の待ちをらむ黄泉
路の君の早く行き給へ

翌年逝去された暮友前野四郎氏を悼ま
れた歌であるが、作者にとっては、夫君
の在す冥土も、黄泉路も、何の境界もな
くこの世の道に続いていたのである。

おろそかに過ぎてはならぬ老の日を絡
まりて咲く鉄線の花

今日一日を生きたということは、定め
られた寿命のうちの今日一日を死んだと
いう事である。「おろそかに過ぎては
いないか」と作者の声が聴こえる。

朱く立てるボストのなかの暗闇に人の
たつきの手をつなぎる

著者は常に学ぶ姿勢を崩されず、終生
無造作に夫の遺愛の登山帽を被りたる
夫が好んで良く被った登山帽を、今日

山崎 きよ子

『花は終りぬ』

は息子が頭に乗せて畠に佇んでいる。そ
の姿は在りし日の夫の姿と重なる。丁度
フィルムの一駒が停止したように。
一瞬を切り取って見事と思う。さらり
と詠みながら哀感のただよう一首である。

幾十年わが縫う服をまとひきて尚人台
のふくよかな胸

洋裁をする傍らに何時も立っていた人
台、その胸を借りて仮り縫いし、補正を
し、日限に迫られて徹夜した暁近く、仕
上げた作品が、ぴたりとその胸に添っ
た時の喜び、疲れも遠くような一時を
念されて」とあり、私は唖然とした。

その後ふとした御縁で、歌集『播磨路』
をひもとく機会に、恵まれたのであるが、
稻村幸子先生の序文の一節に「喜寿を記
念されて」とあり、私は唖然とした。

其の上歌集を読み進むにつれて、作者
の瑞穂しい息息が伝わり、六十才を過ぎ
られてから短歌とは、到底思えず、田
中さんの若さの根源を、此處に見る思い
であった。

共に療養中であった夫君を失われ、悲
嘆のさなかにあつた時「老いの身に妻あ
りてこそ生きのびし我より先に逝くお
そる」夫君の此の遺詠に深く感動され、
りてこそ生きのびし我より先に逝くお

そる」と作者の声が聴こえる。
短歌の勉強を始められたと言う。天性の
才に目覚められる切っ掛けとなつたこの
一首を、後の田中さんの短歌活動を思う
時、どうしても此處に書き留めさせて頂
きたいと思つたのである。

旅立に嫁がくれたるハンカチの香水匂
ふ手を拭ふたび
たぎりたつ思ひもあらむ逆しまに波面
にそろふ海女の蹤

心に残る多くの中から一首を書きそ
せて戴いた。良き師良き家庭に恵まれ
てますますの御健証をお祈り致します。

各地短歌会

入賞入選作品

・神戸新聞社賞

免許証の更新ごとに撮る写真齡かくせ
ぬ貌となりゆく

・波賀町文化協会賞

九十歳になりたる母が病みながら産み
月の牛を気遣ひてをり 北 隆治

・播磨一宮ライオンズクラブ賞

掌にうけしをだまきの種さらさらと感
情線の錐みを埋む

・宍粟郡歌人連盟賞

稻村 幸子 伊東まさ子
雑巾にも出来ず案山子にも着せられず
舅の紋付又もしまへり 篠本 久子

狩獵期は今日で終るといふ星に撃たれ
し鹿の血が土に沁む 山本 千代

亡き夫の三十五年の手垢染む素麺日記
文庫にをさむ 安政 嘉子

後継ぎのなきまま守る峠の田に蕎麦蒔
くと老の草刈り急ぐ 田中よしの

百年を育ちし柿の伐り株に涙のごとく
樹液光れり

もう少し右に左にと指示すれば盲の息
子が畑打ちくるる 森谷としあ

◇西播磨短歌祭

(11月11日・県立西播磨文化会館)

・入選

(11月23日・香寺町福祉センター)

・知事賞

(9月3日・波賀町民センター)

・入選

口細き壜より捨つる水の音淀む思ひを
吐くごとく鳴る 森本萬千子

・県議長賞

括られて角の切り痕焼簾に焼かるる仔
牛が涙をこぼす 安政 嘉子

・県議員賞

義歎の夫の吹けど鳴らざる口笛を吾の
鳴らして犬呼び戻す 山田百合枝

ろの位置のみが似る 篠本 久子

施餓鬼会の読経の中を飛ぶ蜻蛉僧の衣
に時どき触る 日下ふさゑ

悪友と自ら言ひて暮に誘ふ友の電話を
夫に取りつぐ 山田百合枝

素裸の両手抜かれしマネキンに秋陽や
さしむ朝のウインドー 田中 君枝

硬貨一つ入るれば出づる氷片が夜の病
廊に音をひびかす 青柳 良

なほ生くるつもりの顔を写す水そこは
かとなく梅が香れり

思ひ出は悲しみのみにあらざれど瞼に
また併つ紅梅の下

あり雪を出てゆく柩 おのづから音あるときと無きときと落

葉の上の落葉果なし

阿りて人のしりへにつかざりき貧しく
老いて今に貫く

藤の房かすかに揺れてわが胸を光のご
とき風とほりゆく

夜の壁に翅をひろげて眠る蛾を心の汚
点のごと眺めるつ

通風の足の疼きに覚めしより夜とあか
つきのけぢめなき雨

歌詠まず過ぎし幾日か老いてなほ怠る
ことの憩となならず

の電車に独り笑へり 栗山 節子

も音せぬ麻痺の手を拍つ 野中 勝子

兵庫県文化協会賞

捕へたる蝉を逃がしし蝶螂が乱れし翅
をしづかに震む

栗山 節子 龍本 善子

・西播磨文化会館長賞

冷奴に足らぬ生姜を隣り家に声かけて
低き堀越しに借る 伊東まさ子

・奨励賞

葉さくらの道そぞろゆく人と犬大は人
より賢き顔す

朝露に濡れたる足とともにひき悲しみ

わかつごとくに歩む 耳鳴りの中に寄せる波の音われにか
なしき過去よみがへる

老いぬれば哀歎あはきことわりに今年
また併つ紅梅の下

なほ生くるつもりの顔を写す水そこは
かとなく梅が香れり

思ひ出は悲しみのみにあらざれど瞼に
また併つ紅梅の下

あり雪を出てゆく柩 おのづから音あるときと無きときと落

葉の上の落葉果なし

阿りて人のしりへにつかざりき貧しく
老いて今に貫く

藤の房かすかに揺れてわが胸を光のご
とき風とほりゆく

夜の壁に翅をひろげて眠る蛾を心の汚
点のごと眺めるつ

通風の足の疼きに覚めしより夜とあか
つきのけぢめなき雨

歌詠まず過ぎし幾日か老いてなほ怠る
ことの憩となならず

の電車に独り笑へり 栗山 節子

も音せぬ麻痺の手を拍つ 野中 勝子

兵庫県文化協会賞

捕へたる蝉を逃がしし蝶螂が乱れし翅
をしづかに震む

栗山 節子 龍本 善子

・西播磨文化会館長賞

冷奴に足らぬ生姜を隣り家に声かけて
低き堀越しに借る 伊東まさ子

・奨励賞

葉さくらの道そぞろゆく人と犬大は人
より賢き顔す

朝露に濡れたる足とともにひき悲しみ

ふる里創生に思う

山崎郷土研究会

堀 口 春 夫

の城が残っていない。城跡も学校になつて城らしくはない、せめて本多公園でも周辺を城跡らしく取締りたいものである。又、さつき祭りや菖蒲園も花の季節には駐車場が満車になるくらい人が来ると言う。主催者の関西テックも地元に何か古寺でもあればと物色しているそうである。

山崎郷土研究会は毎年春秋二回の研修旅行をしていますが、これは何も老人慰安の旅行のみではない。行先が名所旧跡の史跡地ではあるが、歴史文化の学習のみではなく出来得れば、吾町にも他郷人

に訪れてもらいたい誘致の策も学びたく研修旅行と言う事にしてある。山崎は観光誘致をする何物も無いと言つてしまえばしまいであるが、今は自家用車が氾濫する時代であり休日も多い。一寸した事にも物珍らしく訪ねて来る時代である。

大歳神社の千年藤も地元の人は見あきているが花の咲く頃にはかなり沢山の他郷人が訪ねて来る。そして又、外にも見る所は無いかと尋ねられる。そこで昨年から近くの寺町の古寺を看板で紹介している。



小さな灯

山崎茶道研究会
志 水 宗 喜

て児童教育の現場に携わっていた経験を活かしての地域の子供会の児童にボランティアとしての茶の指導でした。子供会のお母さん達に話しかけ実行にこぎつけたのは五十七年六月でした。翌年の十月の研修会の添え金に子供達のお手前を見て頂いたのをきっかけに、毎年一回お稽古の成果を披露して、共々向上するよう努力してまいりました。

いつの年のことだったか、柴山禪雄師が研修会の講話の後で、今は庄静夫先生に、「研修会も十年を経たのだから、もうそろそろ一人歩きをなさっては。今まで私達が話して来たことが一向に現実に現れて来ない。与えてもらうばかりが能ではないのではなかろうか」という様な意味の言葉をもらされた。私はその時司会役をしていて先生方の側近く居たので、私語の如き師の言葉が心の隅に残りました。

それ以来、本当にそうだ、これまでど

れだけ多くの方々が、会員の向上的為に愛情と努力を注いで導いて下さったことが計り知れないと、思うようになります。それなのに私は何ら報いることなく、添え金の募金が楽しく次の研修会を待つのみで、何ら積極的に動く氣も起さず、又そのすべも分らずに過していました。

心の片隅に報恩感謝の念は少々あって自責の思いは幾分か持つてはいましたので、ふと洩らされた柴山先生のお言葉が身にしみ、自分なりに考えたのが、かつ

山里の片田舎でも子供達の多方面な塾通いはさかんで、それぞれの子供は忙しい日々を送っています。お茶の時なりと

楽しい心休まる一刻を与え、御挨拶がはっきりと出来、相手の身になつて考え、感謝のできる子供に育つてほしいと念じつづ、鵬雲齋宗匠の心を心として指導に当つて來ました。気負っていたのは自分だけで、いつの間か私は子供達に助けられ、励まされての日々でした。

六十二年に二回の眼の手術での入退院、六十三年に突発性難聴の為一ヶ月の入院を余儀なくされ、平成元年は軽い脳梗塞で二週間の入院と、心ならずのお休みにもかかわらず、再稽古の日を待ちわびてくれる子供達に生甲斐を感じ、恢復を早めることが出来たように思います。

研修会の大きなキャンドルから受けた小さな小さな灯ではありますが、地域の皆様に支えられ燃え続けたく思いつつ、後継者の現れることを念じています。

創立当時を想う

山崎美術協会

福岡久藏

過日、伊藤親保先生から山崎美術協会が昭和二十三年に創立された当時のお話を聞きました。昭和二十三年というと敗戦後まもない時で、食べものも着るものもなく、読書したくても本もない時代で、人の心は荒み混迷した時代です。そういう厳しい時代によくもまあ優雅なことが思えます。しかし、そういう荒廃した時代であったからこそ、人々は心の表現や美しさの追求を試みたともいえます。

創立当時に参加された方々のお名前を聞かせていただき、大変懐しく思いますので紹介させていただきますと、写真では内海富之助氏、堀口春夫氏。日本画では小林善太郎氏。洋画では伊藤親保氏、伊藤博夫氏、原田耕吉氏、深川大明氏、福井政雄氏。書では井口つな女氏、石原さく女氏。漆芸では武野金霞氏。陶芸では友沢庄二氏のみなさんが主だった方々だったようです。

初代会長に小林善太郎氏がなられ、第一回の展覧会を山崎小学校の講堂で開かれました。それぞれ表現や技法や志向するものは違っていたでしょうが、みんな相寄り相集って、暗闇の中に一縷の光明を求め、また心の寄りどころとされ

たのでしょう。生活の苦しさに耐え、純粹にいかを訴えようとされたことは山崎町に文化のともし火を点したことになります。

今、私たちは豊かさの中にどっぶり漬かり、三種の神器をそろえ、ブランドものに浮き身をやつし、なお財テクを試みようとしているのでしょうか。もっと人間関係や心の豊かさへ移ろいたものと思います。

最近、絵を見ていますと、ただ単にその形や色を写すことに終始していたり、装飾的な絵づくりが先走っているようで、なんとなく薄っぺらで軽く、ソフトタッチな作品がやたらと増えたと思います。どちらかといえば、自分を見失い現代的な目でものをどうとらえるかを避けてさえいるように思えます。やはり私は自分でできないことや自分の心情を素直に表現することを心掛け、自分の体質をマチエールにじませなければならないと思います。技術的にまずかるうと、表現が野暮ったかろうと言葉ではいい尽せない自分の気持を作品を通して訴えていき、山崎美術協会が益々盛会になることを祈ってやみません。

この春、胴乱を片手にして、家の近くの裏山を植物採集しながら山道を歩いて

達の顔を懐かしく思い浮かべた。

植物図鑑に「とりかぶと」は美しい花

いると、見れない、珍らしい植物の群落を見つけた。草丈は五、六十センチほどあり、その一本を折って持ち帰り植物図鑑で調べると「とりかぶと」と言う名

の植物であった。

「とりかぶと」は猛毒植物で、昔この根から取った汁を矢じりに塗り毒矢を作ったと聞く。私は、「とりかぶと」の名前は覚えていたが、実物はすっかり忘れ記憶になかった。

私が理科教師として、勤務以来四十余年、宍粟郡内は勿論、西播各地で多くの同僚達と一緒に場所での植物採集会には、「とりかぶと」は一度も見つけることはできなかつた。

とりかぶとの群落を発見する

雄 好 宗 久 同 植 物

確かに、四十数年前の学生時代、植物学の担当の先生に引率され、箕面の滝を経て山頂の勝尾寺までのコースの植物採集会に参加した時「これがとりかぶと」と言ふ猛毒を持つ植物である。ある学生が宿舎でこの根を茶びんで煎じてお茶として飲ましたので、飲んだ学生は重体となり大きわぎとなつた」と話されたのを思い出し、私の若かりし当時の恩師や学友

植物同好会は毎月第二土曜日の午後に揖保川のほとりや野原などで、春の草花、林の天然杉の観察会や河原山の野々隅高原での採集会に出かけることもあります。時には、一日弁当持ちで音水国有

然に親しみ、自然を愛する心を養っています。時には、一日弁当持ちで音水国有林の天然杉の観察会や河原山の野々隅高

さつきの町

山崎町

播磨さつき会

上野一人



以前私は、山崎を訪れた人に、
「さつきはどこで見られますか」
と聞かれ、町有の展示場を教えたところ
「あそこはもう見て来ました」
との返事でした。その人は山崎のさつき
にもっと大きな期待をもって来られたの
だと思いました。

近年、各地でさつき祭や展示会が数多く
催されているせいか、山崎町のさつき
祭は、年毎に淋しくなっている様に感じ
るのは私だけでしょうか。さつきの愛好
家も、播磨さつき会の会員の間でもさつ
きの挿芽などする人はほとんどいなくな
り、若い人達のさつきへの関心はさらさ
らないよう見受けられます。このま
までは、さつきの町山崎の名も、
播磨さつき会もなくなってしまうのではないかと
心配しています。

さつきはどこで見られますか」と
と聞かれ、町有の展示場を教えたところ
「あそこはもう見て来ました」
との返事でした。その人は山崎のさつき
にもっと大きな期待をもって来られたの
だと思いました。

近年、各地でさつき祭や展示会が数多く
催されているせいか、山崎町のさつき
祭は、年毎に淋しくなっている様に感じ
るのは私だけでしょうか。さつきの愛好
家も、播磨さつき会の会員の間でもさつ
きの挿芽などする人はほとんどいなくな
り、若い人達のさつきへの関心はさらさ
らないよう見受けられます。このま
までは、さつきの町山崎の名も、
播磨さつき会もなくなってしまうのではないかと
心配しています。

品種がまだ残っており、これらを保存す
るためにも、この現状を町全体として見
直す時機が来ていいのではないかでしょう
か。一宮町には福知渓谷休養センター、
波賀町にサイクリングターミナルがある
様に、わが山崎町にも町花さつきを中心
とした、観光バスが立ち寄るような観光
施設が出来ないものだろうか。

私の提案、与位の高尾山には、一万坪
以上あろうかと思われる放牧場跡の遊休
平坦地がある。ここをお借りして大駐車
場と回りを一周する道路を作り、中央に
盛土で築いた山、そこには、種別、花、
銘柄別にさつき展示棚を設置し、カラー
写真入りの標示板で説明し、歩道を回り
ながら見学できるさつきコーナー、また
一角には平戸つづじの山、霧島つづじの
山、底を沈んで流れている谷川の水を堀
り起こし整備して大ブール、錦鯉の里の
ような養魚場、紅葉樹、森林浴の森等植
樹、秋は周りの山々の紅葉が美しく、山
ありの谷川のせせらぎに沿う林間遊歩道
などと、四季を通じて楽しめる町営のさ
つきの名所が出来たら「さつきの町、山
崎」の名も一段と高まることがあろう。
そうなれば私もかつての人を誇らしく案
内したい。

茶湯者覚悟十体考

山崎茶華道協会 庄 和 夫

荼聖千利休の高弟で、山上宗二が
生前折にふれ、時に教えられ、訓さ
れたことを記録にとどめ、後に続く者へ
のこした茶書が有名な『山上宗二記』で
茶道に志す者の、必読の書として今に高
く評価されています。この書の中に、

「茶湯者覚悟十体」という、一章があり
ますが、ここには、茶湯者の心構え、使
命がのべてあります。私はこの章を読ん
で心をうたれましたが、特に覚悟という
言葉で示されているように、茶湯者は命
がけで御茶を習えとさとし、道に志す者
の厳しさを教えています。同時にこの十
の教えは、現代に生きる私たちの生活を
省みる資にも供したいものです。紙数に
限りがありますので、一部を紹介させて
頂きます。尚利休居士は茶湯者とは、
「目利にて茶の湯も上手、数奇の師匠を
して世を渡るは、茶の湯者と云」といっ
ています。

一、心ノ内ヨリ奇麗數奇
茶湯者は万事につけて嗜み深く、細かく
心をつかうべきで、尊大傲慢をいましめ
ています。この項なども現下の世相を考
えます時、利休にかえれと言いたいとこ
ろです。

一、心ノ内ヨリ奇麗數奇

きれいいざきとは、「和敬清寂」の清に相
当する言葉で、茶湯者はきれいいざきでな
ければならないが、外見的なきれいだけ
でなく、心の中からきれいいざきであるこ
とを教えていますが、茶湯者は人格の高
潔を同時に求めています。

一、酒色慎
茶湯者は飲酒と女色を慎むことを教えて
います。世阿弥の『花伝書』にも、好色、
博奕、大酒、を三重戒是古人掟也と言っ
ていますが、いやしくも一道に志す者は、
大酒や女淫に心を奪われてはならないと
説いています。心すべきです。

世界では社会的地位は問題でない。むし
ろ上位の者に対する粗末に、下位の者
に対しても、律儀に振舞えと教えたも
ので茶道に於ける平等思想で、身分や地
位の高下を問わないの意で、進歩的で人
間尊重の考え方です。

奥深き民踊への道

さつき民踊グループ

北川政子

稽古日は急用が出来てお休みし、民踊に對して重荷を感じておりました。でも何とか参加出来ます時は、大谷様が「北川さんは忙しいから」と色々と衣裳、小道具を揃えて下さり、頑張って踊ってな

“の一言に励されて舞台に立つ事が出来ました。

主人も文化連盟の一員として尺八道に福山先生と共にいそしんで居ります。この素晴らしい『やまさき文化』の灯の下で主人共々老後の趣味に生きたいと願っております。

この道やゆく人なしに秋の暮れ

あの併聖松尾芭蕉が奥の細道の旅を一步一歩辿って心に沁みる句の数々をこの世に残した如く、私達も奥深く限りなき民踊への道を大谷先生の踊りへの愛に包まれて歩んで行き度いと念じて居ります。

やまさきの文化の灯り仰ぎつゝ

おどりの道の奥をきはみて



F.Y.

山崎の謡曲

謡曲同好会

武

夫

山崎町で謡曲を伝授しておられる先生方は五人いらっしゃる。全て観世流の方ばかりで、喜多、宝生、今春、金剛等他流の方は居られない。夫々に觀世宗家からお免状を戴いて弟子を取立てて居られる。

掬水会、上寺の池田大典師は觀世流名譽師範で、大阪の大西家に師事して六十

年、此の道ひと筋に生きて来られた方で、自宅に本格的な能楽堂を持って居られる。大小鼓、笛、太鼓等夫々プロについて勉強され、特に仕舞にすぐれて居られるとは定評がある。能は羽衣、船弁慶、井筒、松風、熊野など、大曲道成寺も開かれた。お弟子さんは二十人ほどだが皆二十年選手で永く続いている。不思議に女のお弟子さんが少い。(七十五才)

秀峰会、横尾昇師は西町に住んで居られる。福王流から觀世に転向された方で、京都の杉浦家に師事して居られる。

弟子さんから木内十三比古師の門下生となられた方である。觀世流名譽師範。年令は五十五才。城下地区鶴木の自宅で教えて居られる。趣味の広い方で詩吟、扇舞、艶歌、盆栽、陶芸、茶の湯等々。気さくな魅力ある人柄がお弟子さんを引付けている。お弟子さんは十五人位

以上簡単ながら山崎町の謡曲界の一面を叙して見ましたが總体に女の方が多いのは女子教育が男子に優先した山崎の土地柄の現われと思われますが如何。

山崎福王会、江崎金治郎師は四十五才先代を襲名されて間がない。觀世別派の福王流家元で職分である。姫路市に住まわれ出稽古に通つて来られる。大変世話を好きな方で隔年催される八幡神社薪能は師のお蔭で開催出来ると言つても過言ではない。お弟子さんは殆ど御婦人で十五人位。

祭壇の太鼓の音も絶えて深まりゆく秋の野山も紅葉に彩られて菊の香ほのかに漂いもの静かなたゞまいの今日この頃、大谷様より「やまさき文化」への投稿依頼を受けて戸惑い乍も光榮に存じ、拙い文ではございますが書かして頂こうとベンを取りました。

師大谷先生のきりっとした舞姿舞扇にみせられて此道に入つて十年、年こそ重ねておりますが自信をもつて一人舞を踊る器用さも無く、大谷先生のお優しい御指導と大谷様始め会員の方々の友情に支えられて此處まで参りました。

火曜日のお稽古日も主人の公用などで度々休みますので皆様とは何時もおくれがち。文化会館、老人ホーム、老人センターへの慰問等も商売の忙しい時と重りますので、心の中で毎回参加出来る会員の方々が羨しく、淋しい思いに駆られます。新しい踊りを教えて頂くお稽古日の時先生の美しい踊りのゆくえに今度は習つて身につけなければと思ひますが、次のお

方々は五人いらっしゃる。全て観世流の方ばかりで、喜多、宝生、今春、金剛等他流の方は居られない。夫々に觀世宗家からお免状を戴いて弟子を取立てて居られる。

掬水会、上寺の池田大典師は觀世流名譽師範で、大阪の大西家に師事して六十年、此の道ひと筋に生きて来られた方で、自宅に本格的な能楽堂を持って居られる。大小鼓、笛、太鼓等夫々プロについて勉強され、特に仕舞にすぐれて居られるとは定評がある。能は羽衣、船弁慶、井筒、松風、熊野など、大曲道成寺も開かれた。お弟子さんは二十人ほどだが皆二十年選手で永く続いている。不思議に女のお弟子さんが少い。(七十五才)

秀峰会、横尾昇師は西町に住んで居られる。福王流から觀世に転向された方で、京都の杉浦家に師事して居られる。

弟子さんから木内十三比古師の門下生となられた方である。觀世流名譽師範。年令は五十五才。城下地区鶴木の自宅で教えて居られる。趣味の広い方で詩吟、扇舞、艶歌、盆栽、陶芸、茶の湯等々。気さくな魅力ある人柄がお弟子さんを引付けている。お弟子さんは十五人位

以上簡単ながら山崎町の謡曲界の一面を叙して見ましたが總体に女の方が多いのは女子教育が男子に優先した山崎の土地柄の現われと思われますが如何。

囲碁新聞

うらばなし

山崎囲碁同好会

高野圭介

昨年文化の日、ふるさとの囲碁新聞が発刊されました。

多くの方が、情報を取り合い、共に囲碁の楽しさに醉いしれるような起爆剤を望んでいたからでしょうか。

もう十年余りにもなりました。故大井万兵衛翁の白寿祝囲碁大会の席上で、橋本昌二九段が、「碁は一人一人のものであると同時に、みんなのものなんです」と、いわれたことが、私の脳裏に焼きついていました。

「Alle für einen, Einer für alle」と、記してあるのを見付けました。

また、テレビでアニメ三銃士のダルタニアントが、「一人は、みんなのために、みんなは、一人のために」と叫びます。神戸商大のラグビー部の相言葉として「All for one, one for all」と、いいます。全く同義のこの言葉は、なんと、世界人類の共通した一つの命題でもあります。

のです。

宍粟郡囲碁同好者が一千人を越えるにもかゝらず、いつの囲碁大会にも全員の一割にも満たない人しか参加されないのが現状です。

二、囲碁哲学としてのコラム欄、囲碁の内面的表現としてのマンガ、ワンボイントレッスン、詰碁、対局棋譜を継続記載する。

三、刊行物の配布方法。

さて、最も悩ませるのは配布方法です。郡内四町は、夫々百部ずつお願いするとして、山崎町は八百部と読みました。人口二万七千の3%が概算の基礎です。面白いことに部落数が八十五あります。

つまり、一部落十部宛、一人が三部落を受けもつとして三十人近い人にお世話になる。こまでは机上の計算が出来るのです。が、果して、計算通りに行くかどうか、一同不安でした。

又、発刊する新聞の反響予測も気がかりです。新聞の原稿のレイアウトや編集

方法など、ご指導を受けた神戸新聞の現職の人でさえ、出来ばえについて「全く分らない」と、いうのが本音のようでした。ただ、三年後の一巡刊行を終えた後、どんな評価となっているかが楽しみであります。

この新聞自身の評価のよしあしもさることながら、いかに地域の囲碁愛好者の方々に親しめる新聞で、血の通った中身をもっており、最終的に、みんなが、「囲碁はみんなのもの」と、いう合言葉のもと、碁石の大合唱が聞けたら……と念ずるのみです。

ともあれ、初回の新聞は出ました。ご上経過報告をかね、お伝えします。

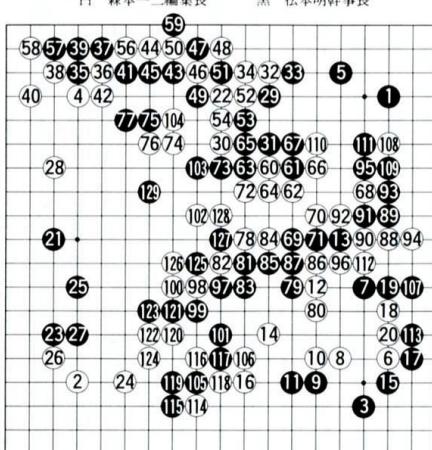
一、編集長に森本一二氏を選出する。

平成元年12月6日

宍粟囲碁新聞発刊記念対局

於：囲碁道場敲玉

手合別：互先（先番5目半コミ出し）
白 森本一二編集長 黒 松本明幹事長



賀 堂 流 篪 乃 丸 吟 詠 会

創立二十周年記念大会を終えて

賀 尉 小 川 登

賀堂流篋乃丸吟詠会創立二十周年記念吟道大会（山崎町、山崎町教育委員会、文化連盟、神戸、毎日新聞社、賀堂流宗家の後援）を十二月三日（日曜）山崎文化会館で開催致しました。

神戸新聞の記事等を引用しますと、会員百三十人のほか、西播を中心に各地から訪れた贊助出演者八十人余りが舞台に立ち華やかな舞台となつた。吟詠、合吟、扇舞吟の外に、吟詠に合わせていけばならない華道吟（谷川柳秀先生社中）書作品を制作する書道吟（平成元年度日展入選者山部桂翠先生）小林寺拳法（山崎道院東豊俊道院長）の演武など計百四番が披露された。

また山崎町の歴史、風物をもとに創作された（作詩小川賀尉、振付喜多冠翔先生構成吟の発表もあり、客席を埋めた約六百人の拍手を浴びた。と「華やかな舞台を繰り広げる吟道大会」が、写真入りで報道されました。

私は予てより、芸能はより多くの人々に観賞して頂くことによって、地域文化

たずに御観覧下さいました。流石に賀堂流はもとより紫州流、摂楠流、撰り抜きの吟詠家の御出吟を頂いただけあって、詩吟を御存知無い観客にも「感動を与えることが出来たのだなア」と、密かに喜ばせて頂いた次第です。

の向上にもつながり、演者自身の励みと向上に役立つ、せめて年一回の芸能祭だけでも文化会館を満席にしたいと、機会ある毎に発言して参りましたが実現することが出来ず、今日に及んでおりました。謡、日舞、邦楽なども趣味の会であるから人様にお見せするのはおこがましい、と考える人也有りましたが、そのような考へ方は封建時代に「藝事は習つても良いが人に見せてはならない」とした藩の法度の遺物であるとまで申して参りました。

それが今回、図らずも私達の篋乃丸吟詠会の二十周年記念大会で文化会館が満席となり、会員は座る場所が無いような盛会であります。多年の願いを達成すことが出来て嬉しうございました。これも偏に百三十名会員の頑張り及び山崎町当局、並に関係各位の御協力の賜と感謝致しております。更に吟詠は解り難い芸能ですから、折角来て頂いてもすぐ帰られるのでは無いかと心配しておりますが、最後まで大多数の皆様が席を立

あり、神道学者であると同時に、漢詩の名手であります。先生は有名な「有感」の外に、沢山の詩を遺しておられますが、賀堂はじまって以来と申してもよいのでは無いか」と激賞して頂きました。又、友人、諸先輩の吟詠家の皆さんからも「郷土を詩つた、オリジナル作品漢詩六編、和歌一首が良かった。他では真似の出来ないことだ」とも言つて頂きました。本誌上に山崎の風物と歴史を詩つた構成吟を掲載させて頂きます。

日本全国の吟詠人口は百万人と申されています。私達の属する賀堂流は登録会員が四、〇〇〇人いますが、其の中、漢詩の作れる人は二、三名です。私の師、松垣賀陽先生は広島県の人で、頬山陽の流れを汲まる方だけあって、其の御門下の方には、漢詩を作られる方が沢山いらっしゃいます。私達の町は山崎閑斎先生ゆかりの地であります。先生は儒生ゆかりの地であります。先生は儒生として表彰した篋乃丸吟詠会の会員には「漢和辞典」を記念品として贈り、私は閑斎先生ゆかりの山崎に、漢詩の芽を育てたいと考えております。今回、功労者として表彰した篋乃丸吟詠会の会員には「漢和辞典」を記念品として贈り、私は閑斎先生ゆかりの山崎に、漢詩の芽を育てたいと考えております。

文化連盟会員の皆様の御指導と御鞭撻

を切に御願い申し上げます。

山崎之四季
戎 初 詣 賑 福 祥 彰
池 畔 弁 天 銀 柳 光
最 上 櫻 花 春 煙 漫
千 年 藤 樹 紫 雲 粧
臯 鶴 街 澄 夏 險 美
乱 舞 銀 鱗 揖 水 凉
紅 葉 篪 丸 青 史 映
八 幡 神 興 祈 豊 鄉

小川賀尉

戎の初詣賑い、福祥彰れ

池畔の弁天銀柳光る

最上の桜花に春爛漫

千年の藤樹紫雲を粧う

臯鶴街に溢れ夏險美しく

銀鱗乱舞して揖水涼し

紅葉の篋乃丸は青史を映し

八幡の神輿に豊郷を祈る

新潮会の想い出

和田 疎人

私ども新潮会が呱々の声をあげてから
本年は三十七年目を迎えました。

今、その足跡を振り返って見て、昔日
の様な意欲は少し減退しましたが、年令
的にはまだまだ、萎縮する年令では無く、
毎月一回の例会は、気候、天候に左右さ
れることなく、90%の出席率を誇りとし
ております。

文化的な活動、親睦の会として、発足
した当初は二十数名ほどであった会員も、
最近老会員の、黄泉路への旅立ちがた
びたびあって、年々減少してゆくのは淋
しい限りですが、これを防ぐには、会
員諸君の強烈な精神力に期待する事が大
きいと思います。お互に頑張りましょう。

前記の如く、出席率は確保出来ている
ので、毎月一回の例会には必ず、講師を
招聘して講話、エッセー等を聴取して、
遠慮ない質疑応答も行うという有意義な
集会になっており、講師は兵庫県下、宍
粟郡内の著名な文化人、経済家、公正な
公務員、実業家、教育者等々の中から選
んでおりますので、地域社会にいささか
でも貢献出来ます様にと、今日まで三十

七年間、同じペースを崩さず、運営を続
けております。

海外に研修旅行に出かける私どもの会
員があれば、講師として、その見聞、体
験談を聴取することもあり、現に本年度

は西兵庫信用金庫会長の杉本清美氏の歐
州旅行の見聞談を「欧洲を巡りて」と題
して、私ども新潮会の例会に発表があり、
興味と深い感動を覚えたのであります。

本年招聘の講師諸賢は
山崎町長 安井淳三殿
(代理宇田企画課長殿)
山崎警察署長 葛木耕三殿
六糸福祉事務所長 芝野謙二殿
山中医院院長 山中陽一先生
NTT山崎営業所長 岡本亘弘殿
本年は以上五名の方の講話、エッセー
を拝聴してそれぞれ胸の高鳴る格調高
いお話を、まだ記憶に新らしく胸に
蘇って参ります。

また私ども新潮会は五年毎に記念誌を
編集発刊して、生涯の記念として会員一
人一人に頒布し、之を保存する事を続け
ております。

本年も会員同志で春は爛漫の桜花に、
秋は錦織の紅葉に風懐を託し、津山の鶴
山公園の満開の桜に、西兵庫金庫本店の
屋上の十五夜の月見に、赤西音水の紅葉
狩に余暇を利用して、会員の研修親睦の
旅を実施いたしました。

将棋遊び

後藤一孝

将棋の駒を使う遊びは、子供の遊びと
して伝わっており、私の少年時代は、近
所の仲間たちと次のような将棋遊びをよ
くやつたものです。

はさみ将棋——将棋盤の初格的に一列
に九枚の駒を並べて、相手の駒を前後、
または左右からはさんで取るゲーム。こ
の遊びを卒業して、本将棋(普通の将棋)
に進んでいったようです。

飛将棋——双方、三個ずつ三段に九個
の駒を並べて、互に一格ずつ交互に駒を
進める。相手の駒に会えば、それを飛び
越え、早く敵陣地に入つて、三個ずつ三
段に駒を並べ終えたほうが勝ちとなる。
このゲームに勝つ秘訣は、なるべく自分
の駒は敵の駒を飛び越えるようにし、自
陣の下段の駒は遅く動かすようにする。

廻将棋——将棋盤の隅の一格を出発点
とし、まず、それぞれ「歩」から置き、
金将四枚を振り、その出様によって予め
数を決め、次の隅の一格に駒が進んだ時
に「歩」を「香車」に変えて行う。続い
て、「桂、銀、角、飛、玉」の順に格上

げていき、先に「玉」になつた方が勝
ちとなる。これは、駒の振り方によつて
勝負の秘訣があつたようです。

盜将棋——盤の中央に積上げた駒の山
から、順次によい駒(玉を最上、歩を最
下位)を取つたほうを勝ちとする。これ
は音を立てずに駒を取ることを前提にし、
少しでも音を立てれば、手番が相手に変わ
る。指先の器用さが勝敗にかかわって
くる。このゲームが終了すると、引き続
いて次のゲームに移る。

振将棋——金四枚を振り、(金将は、
一つ堅になつたのを十、横になつたのを
五、他を一として数える。) その数だけ
振った者に支払う。計算法は、王将は百
円、飛車は七十円、角は五十円、銀は二
十円、桂馬は十円、香車は五円、歩は一
円としていたようです。

他にも将棋遊びは多くあつたようですが、現在では、このような子供の遊びは
少なくなり、テレビゲーム、ファミコン
の時代になつています。

勝負の世界は、子供の遊びにおいても
内在し、そこにおもしろさがあり、また
生活文化が生まれると考えますが、そ
の根底には、人間とのかかわりがありま
す。かつての遊びは「人間」対「人間」、
現在は、どうも「人間」対「機械」であ
るようですが。

森と文化のシンポジウム

第一部について

藤井七代

先般文化会館にて森と文化のシンポジウムが開かれました。講師の立派な先生方の中にシベリウスに造詣の深いピアニスト館野泉の名がみえ、当日楽しんで聴衆の一人となりました。先ず先生より森と湖の国フィンランドの芸術家の典型と稱せられる作曲家シベリウスについて述べられました。シベリウスは人間は森の中かメトロポールのどちらかに住むべきである。森の中でこそ自分の心があらわれる。森を逍遙し自然（魚釣り草採り鳥にふれる）等の原始的な生活により芸術家に生命力創造力が与えられるのだ。本人自身も43才より92才の生涯を森の山莊で過ごし自然を愛し静寂が語りかけるものを大切にした。水道の音を嫌い、雨樋は木を用い全ての自然の奏でる音をこよなく愛した。シベリウス作曲の交響曲第七番は百二十名のオーケストラで楽器の音が多いにも関わらず果てしなく延々と続く森の静寂が表現されている。交響詩タビオラ（森の神様の居る処の意）では人間と森とが完全に一体となってしまふ音楽である。この様な作曲者は西欧人

では唯一人であろう。…というおはなしでした。ピアノ演奏の解説に入り、一、即興曲・星と湖水の煌き、木々のざわめき、人の心のときめき、二、森の教会：東フィンランドには世界最大の木造教会があり四千人が礼拝できる、三、樅の木：北欧では永遠の生命のシンボルといわれ、一九一七年フィンランド独立の記念として首都ヘルシンキに植樹された。四、激流：フィンランドには湖が数千あり、湖と湖を繋ぐ川の激流を利用して材木が運ばれている、という要旨でした。ピアノが鳴り出し、瞑想の内に聞き入りました。憧れはいても未だ旅した事のない北欧の風景が断片的にイメージの中に表われました。それは東山魁夷画伯の「白夜光」等の風景であつたりしました。それに加へて樹々にさやぐ風、湖の藍さへ伴つておりました。激しい流れでは、知床より眺望の北の海、上高地の梓川の清冽な流れ、櫻平より俯瞰の黒部川、以前旅した秘境の水韻が曲の上に重なり心が遊ぶ思いでした。交響詩「フィンランディア」を聞く度に新たな力強い感動を覚えるのは、シベリウスが心から祖国を愛していたのだとしみじみ気付かされました。郷土を愛する心、それはいつの場合でも大切であると強く印象づけられたシンポジウムがありました。



一席

よくきけば生きてるようなおちば音

菅野小六年 庄 健裕

二席

木の実たちかれ葉の中にかくれんば

菅野小四年 福井瑞穂

三席

秋の雲悲しいことを言いたそう

菅野小六年 福井圭介

四席

きこえるよ落葉の歌声サラサラと

城下小五年 植田一樹

五席

まんぼけいあるいてかぞえるおちば

戸原小四年 宮本浩典

六席

おちばちりあきのじゅうたんあざや

かに 菅野小四年 大崎英恵

七席

かれ木の葉川の流れにゆれている

山崎小五年永井亜矢子

八席

ちるもみじくるまるまわるかざぐる

ま 戸原小三年 南光まや

九席

あきのくも遠くへさつてまたきたよ

城下小四年 井上貴敏

十席

おちばがねカサカサとわらって



歴史を楽しむ

荒木俊介

一般に知られている歴史には、虚飾とか、間違つていい伝えられているものが多いが、中には、どうにも理解し難い謎めいた事が、出くわすことがある。そうした時、その事柄について、自分なりにいろいろと、空想というより仮想をめぐらして行くのも、面白く、楽しいものである。

「翁草」という寛政期の書物がある。信憑性は極めて高く、森鷗外の「高瀬舟」などは、この中から取られている。その中に、本能寺の変で、直接、信長に手をかけた三人の武士の名が上げられ、その場面が、簡潔な文章で描写されている。

秀吉は、この者らを斬罪にすべく、全國に命じて、探し出しているが、不思議なことに、この三人は、変名をして、それぞれ秀吉配下の武将のもので禄をはんでいるのである。ことに、その中の一人安田作兵衛と名のる武士は、秀吉配下の唐津八万石、寺沢志摩守広高にその十分の一の八千石で召し抱えられている。この二人は、昔、共に平武士であった頃、どちらかが、城とり（城主）になつた時は、

その十分の一で召し抱えることにして、互いに約束を交わしている程の旧知の間柄なのである。

こゝに、空想の芽生える余地が生じる。

つまり、秀吉の草の根を分けてでも探しとの敵命にも拘らず、どうして探索の目を逃れて、しかも、秀吉配下の武将に仕えておられたのだろうか、ということである。秀吉に果して、本当にこの下手人達をとらえる意志があつたのだろうか、と疑わざるを得ない。

時は、恰も、下克上の戦乱のただ中である。叡山を焼き打ち、室町幕府を倒し、朝廷をも、ないがしろにしようとした狂暴とさえ思える信長の存在は、諸将の頭上に鉛のように重くのしかつっていたのではないか。又、主、信長と、下臣、光秀との陥落な関係も、人ごとでなく、いつ明日は我が身となりかねない、といふ不安を心の片隅に誰もが抱いていたに違いない。

その様な状況下で、この本能寺の変を知った秀吉の心中では、怒りと同時に頭の上の重りが、とれた思いがした、と想像しても、あながち、間違いではないのではなかろうか。この深層心理が、秀吉をして、この三人の下手人達を見逃させたのではないか……などと空想して行くのも、歴史のもつ楽しみの一つであろう。

菜の花漬け

北川泰子

有名な京都の菜の花漬けは、花が大きすことや、甘みがあることからアブラナだと思われます。徳島県や香川県で栽培されていて、早朝に摘んで京都へ送られる、と聞いたことがあります。辛みはありません。

私は、花は小さいけれど、セイヨウカラナのほうがおいしいと思っています。アブラナのよう柔らかくなく、歯ざわりが新鮮です。安い（タダ）ところも魅力です。

ただし、この花が開きると、何だからんなにおいがしますので、一番上の花が、少し、黄色く色づいたかな、というところで摘むのが最高です。

今年は、きっと、早いですよ。

類が異なります。

セイヨウカラシナはアブラナとクロカ

ラシ（種子から洋ガラシをとる）との交配種の一種で、北アメリカやヨーロッパに、広く、野性化していたものが、二十年前に、日本に入ってきた帰化植物です。

この花を、つぼみのうちに摘み、塩をふって軽く揉んでから熱湯をかけた後、一夜漬けにすると、ピリッと辛みのきいた菜の花漬けができます。熱湯をかけることによって、アツがぬけ、辛みが出ま



セイヨウカラシナ

◎ 山崎町文化連盟役員及び団体名

事務局長	福山清一
監事	藤井慧乘
安井道夫	荒木俊介
安井清介	本條衛
稻村幸子	山崎美術協会
伊野操治	山崎文學会
秦耕三	山崎郷土研究会
三宅宏佳	山崎茶道研修会
恒藤周一	山崎茶華道協会
杉元栄男	播磨さつき会
菅原粧夫	山崎郷土芸能保存会
新潮会	山崎歌人協会
高野圭介	山崎邦楽邦舞研究会
藤井七代	山崎将棋同好会
塚田英夫	昭和会
井口武一	杉崎詩舞道連盟
植物同好会	山崎俳句協会
大谷つるゑ	
三浦昭平	
垣口正信	
植物同好会	

編集後記

編集長 荒木俊介

本号を編集するに先立って、委員会を開いた席上、絵の担当を今回から女性に登場願っては、という意見が出て、衆議一決、その結果、横野婦美子先生にお願いすることになりました。

女性特有の柔かい線で描かれた絵を拝見して、今迄とは違ったマルヘンの世界を思われるような温かい明るさを感じました。きっと紙面に潤いを与えてくれるものと期待しています。

この様に、編集の仕事にたづさわっておりますと、山崎町の文化面に於ける町民の皆さんの活躍が手にとるように分つて、その水準の高さに今更のように誇りを感じます。今後、この水準をより高めるべく、優れた後継者を養成することが、これからの大変な責務ではないでしょうか。

創作では、浅田先生の好短編「車曳き」を掲載することが出来ました。青少年にも読んでもらいたいような作品で、茶の間を樂しませてくくれることと思います。又、コラム欄には山崎町庄能出身の県立広島大学教授小倉正恒先生に登場願いました。真摯な学究一途の生活の厳しさと、それを乗り越えて来られた先生のご努力に胸をうたれました。先生の益々のご活躍をお祈りして編集後記を終ります。

□A機器・事務用品・スチール家具
学校設備品・理化学機器・楽器

イトー オフィスサービス 株式会社

(旧社名 伊藤文具)

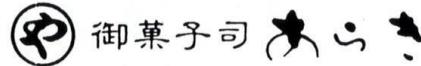
代表取締役 伊藤 勉

山崎町中央商店街 TEL(0790)62-0126

創業明治28年・さつき本舗

四季の菓子

御進物・おみやげ・お茶うけに、四季折々の
真心こめた手づくりの御菓子を



御菓子司 さつき

本店：播州山崎町さつき通り (電)62-0170
山田店：播州山崎町山田 (電)62-0160



飛石機械産業からのお願い

人が人として幸せになれる処方箋は何か、そのようなことを考え「幸福の泉」を生活信条に、自作自演で30数年を歩いて参りました。昭和46年、会社発足時に経営理念と改め、お客様のご信頼にお答えする為に、人としての使命感に燃え、それを無限のエネルギーとして全社揚げて取組んでおります。

当社では、企業は社会の公器でなければと申し上げており、流通の世界の中で生活文化の向上を願い、多目的に活躍しておりますので、尚一層のご支援をお願い申し上げます。

TOBIISHI

飛石機械産業株式会社
TEL (0790) 62-1700
飛石機械 dept.
TEL (0790) 62-1700
飛石機械・クリエイティブ
TEL (0790) 62-3610
飛石機械・クリエイティブ
TEL (0791) 3-4022
CREATIVE dept.

◆最新型カラー現像機導入◆

カラープリント・スピード仕上げ
良い品を・安く・安心して買える店



フジアカメラ

Specialty Camera Shop

宍粟郡山崎町東鹿沢26-3 ☎ 62-2089

山交タクシー

山崎神姫バス西隣

電話 0790-62-2166(代表)

壽

幸せへの旅立ちに――。

ふじむら貸衣裳

宍粟郡山崎町山崎181 TEL (0790) 62-0052

安全で快適な生活をお届けする

共同石油株式会社特約店



株式会社 本條商店

社長 本條 衛

本社 兵庫県宍粟郡山崎町中井96 TEL (0790) 62-4321(代)

本
醸
造
龍
神

し
ば
り
た
す

ふるさとのお酒

清酒
山陽
盃

確かな品質

純米酒

き
へ
ん
ま

サンヨウハイ

山陽盃酒造 TEL (0790) 62-1010(代)



兵庫県山崎町

老松酒造有限会社

地元にひろがる

心のふれあい

にしあん



西兵庫信用金庫

理事長 菅原 栄夫